

続、やはり俺の魔王攻略は間違っ  
ている。

harusame

前作「やはり俺の魔王攻略は間違っている。」の続編です。 <https://syo>

[setu.org/novel/51278/](https://syosetu.org/novel/51278/)

魔王こと雪ノ下陽乃に挑んだ村人に過ぎない比企谷八幡の運命は…。

ラブコメです。また旅行します。壁殴り代行がいるかもしれません。

# 目次

- 第1話 俺と魔王と眩しい日差し
- 第2話 俺と魔王と雪ノ下の驚愕
- 第3話 俺と魔王と他人の顔
- 第4話 俺と魔王と仁王立ちの



## 第1話 俺と魔王と眩しい日差し

「世界が、この目に映る何もかもが美しい」

とある個性的な人物達が集う荘の青年が憧れの年上の先輩と念願の恋仲になった翌朝の出来事だったそうさ。彼には世界が変わって見えたのだろう。まあ、俺が先日読んだとある漫画の話である。

しかし現実はどうだろう。

単なる人間関係の変化で世界が簡単に変わるものだろうか？

×××

本日は3月某日、つまり修了式の翌日。

念願の春休み初日であるが。今までの俺の人生とは大きく変わっている。

昨日、学校の屋上。

村人と魔王との出来事。

村人は俺こと比企谷八幡で。

魔王は雪ノ下陽乃。

県下有数の大手建設会社の社長令嬢であり、才色兼備の魔王系女子大生。誰もがリア充の中の女王と称してもおかしくは無い、俺とはあきらかに違う世界の住人。そんな村人が魔王を攻略しようとした荒唐無稽な話。

しかし、その結果をどうやら俺は現実のものとして受けとめることができてないらしい。

……。

……。

……。



「うわー、お兄ちゃんスマホ見ながらニヤニヤしてる…」

リビングのソファに寝転がっていたら小町からそんな言葉を受けた。普段ならそのまま「きもい」や「犯罪者のな」と言った発言が飛び出すところだが…。

小町は俺の分のモーニングコーヒーをテーブルに置くとソファに腰かける。

「陽乃さんからのメールでしょ？」

俺はスマホをポケットにしまって無言でコーヒーを口にするが、飲んだ瞬間ぎよつとする。

練乳入れすぎだ。甘すぎる。

「今日は初デートかな？気合入れてコーディネートしてあげるねお兄ちゃん！」  
ニヤニヤしているマイシスターに俺は何も言えなかった。

×××

話は昨日の晩にさかのぼる。

夕飯前にリビングにいていつの間にか小町が話しかけてきていた。

「——ってことがあってね、やっぱり高校生になったら……ってお兄ちゃん。さっきから小町の話聞いてないでしょう」

「あ？」

「あ？ じゃないよ？ 今日修了式だったんでしょ？」

「ああ」

「……なんかいつにもましてぼーとしてるよね」

「ああ……」

「お兄ちゃん？ もしかして今日学校で何か……」

「ああ、うん」

「ええっと……。うーん。いやでも。あのね？小町はお兄ちゃんが話したくないなら何も聞かないけど、いつでも相談にのるからね？」

「ああ」

「なんかお兄ちゃんが『カユ、ウマ』とか言いそう……。うう。すんごい気になる……」

「……………ことになった」

「……は？」

「…お付き合いすることになった」

「はあ!？」

「誰が？誰と？お兄ちゃんが？誰と？雪乃さん？結衣さん？生徒会長さん？大志くんのお姉ちゃん？」

「…陽乃さんだ……」

「あっ。やっぱり」

「なんだよ。やっぱりって……」

「だって…。まあいいや。それよりお兄ちゃんおめでとう!! お祝いしないと!! 夕飯は赤飯炊くね」

「いつの時代だよ…」

夕飯に本当に赤飯が出てきて、親父や母さんまでニヤニヤしていた。親父が彼女が出来たときの心得とか語り出したからとりあえず無視。母さんと小町からも完全にスルーされていた。

「小町がサポートするから安心してね。デートのファッションとか、頭の先からつま先までお兄ちゃんを完璧にチェックするから!」  
とホッチキスを振りかざしそうに小町が張り切っていた。

×××

俺の目から見える世界は果たして変わったのだろうか? 朝、顔を洗ったときに

鏡で見たその多少個性的な目はいつもと変わらなかった気がする。

午前11時。

リア充の多いスターフロントカフェに身を置きながらそんなことを考えていた。

昨日、あの屋上で俺は無謀を通り越した冒険に挑んだ。その結果は甘んじて受けないといけない。ただ、自己保身と心の平穏を求めて止まないぼっちマスターの俺が、これから訪れるであろう自己否定と波乱万丈な日々耐えられるだろうか。

そんな不安と心配は正直ある。

というか今後のことを考えると冷や汗が止まらない。

デート中らしき大学生くらいのかにもリア充っぽいカップルをぼんやりと眺めながらそんな思考を堂々巡りさせている。

客観的に見ると、俺もあんなリア充の仲間になるんたらうか。小町のコーディ

ネットのおかげで見かけには問題無いと思うが…。

…。

……。

……ないな。

なんだかとても場違いな気がしてきた。

この場に自分がいるのがなんだか間違っているような気さえしてくる。いつもの  
ら気にしない周囲の目も心なしか気になりだす。

もし、

全ては俺の勘違いで。

全ては俺の思い違いで。

全ては俺の妄想だとしたら。

俺は…。

当然、そんな事はある得ないことも分かっている。昨日自分が手を伸ばしたものを  
否定することはもうしない。そう誓ったのだから。

だがしかし。

十数年で練り上げられたぼっちマインドがたった一日で180度変わるのかと言え、そう簡単な話では無いのだ。常に保身を、リスクを、相手の裏を見つめ続けてきた日陰者の俺には今から自分が歩むであろう道が明るすぎる。

眼が眩むほどに。

…。

気が付いたら、頼んだコーヒは空になっていた。いつの間にか飲み干したらしい。しかし喉の渴きが何故か癒えないような気がする。

我ながら自分の小心者ぶりに呆れてしまう。

ふと、

柑橘系の香りが脳裏をかすめたような気がした。

入口の自動扉が開く音。

飽和した店内の空気が入れ替わるような。

迷いなく、淀みなく、はっきりと分かるように俺に向かってくる足音。

店内の何人かの男性が思わず流した視線を背にしながら。

「お待ちせ。八幡」

赤のコートみたいな、丈が太ももくらいまでのワンピース。黒のストッキングにヒールの高い靴。そんな、ただそこにいるだけで周囲を圧倒する魔王様こと雪ノ下陽乃。

だが、そう言って俺に向けるのは外骨格を纏ったでもなく、蠱惑的でもない、ただまっすぐな微笑み。

まるで子供のように楽しそうな。

…。

…いや、…その。

しょっぱなからそういうのは困りますよ。

八幡のHPの最大値は少ないので。

「その、あれです。改めて…。よろしくお願いします」

そう言って頭を下げる。

何事も初めの挨拶は肝心だ。

「うん。よろしくね」

「ちなみに…き、今日はどうしましょうか？」

「あのね」

「八幡と話したいことがいっぱいあったんだけど…」

陽乃さんは対面の席をスルーして俺の隣に座りながら、

「今はこうしてるだけでいいかな」

俺の肩に体を預けてくる。

アイエエエエエエエエエエ!!!

鼻腔をくすぐる甘い柑橘系の香りに意識が持っていかれそうになる。

だつてさあ！

さらにさあ！

俺の肩をぐりぐりしてるんだもん！

なんか猫みたいにさ！

なんかいろいろ柔らかいところが当たってるの！

それにさあ！すんごい、いい匂いするし！

そんなんされたらHPが持ちません！

八幡の鼓動がどつたんばつたん大騒ぎ！

そして、甘い吐息が俺を痺れさせそうな距離で。

獅子は鼠を狩るときでも全力を出すかのように。

俺のどうしようもない頭を見透かすかのように。

誰しもが到底目を背けることができないように。

吸い込まれそうなただ美しい瞳で俺を見上げる。

…。

……。

………無理です。

理性と言う名の、八幡の内なる何たらはすでに瀕死であります。魔王様はやはりとんでもない。

何とか目をそらしながら。

「えっ。あっ。陽乃さん、周りが…」

周りからの視線を感じる。どう見ても注目を浴びてる。それはそうだろ。以前の俺なら、こんな公然といちゃついでる男女見たら爆発しろと思う。

「は・る・の・さん、はいらないよ」

だが、魔王様は全く気にされないようで。

「その…いきなり呼び捨ては…」

いや、まあ世間一般ではそうなのかもしれないが。しかしいきなりはハードルが高すぎる。

「そのうちお願いね」

「ええ、まあ…善処します…」

結局。

世界が変わらないことも。

相変わらず厳しいことも。

改めて身に染みて理解した。

しかし、

うだうだ考えている余裕は無さそうだ。

とりあえず目の前のことに集中しよう。今日1日何とか生き延びるために…。予想以上に心身への負担は大きそうだが…。

村人は村人なりに魔王様についていくしかないだろう。

「外は相変わらず眩しいが。

「と、とりあえず店を出ましようか…」

「今が楽しくて仕方ないような。」

「じゃあ、行こうか！」

↑子供のような笑顔を向ける彼女のために。



## 第2話 俺と魔王と雪ノ下の驚愕

エンドレスに繰り返すことが望まれるような夏休みの8月後半と違い、元から短いと分かりきっている春休みは割りとあっさり過ぎるものである。例年、俺はぼっちの時間を有効に活用し、怠惰かつ快適に過ごすことにしていた。

が、それは去年までの話である。

「なあ、小町？デートって何日まで連続するものなんだ？」

俺の何気ない一言に小町は目を真ん丸にしていた。

「…うわあ。お兄ちゃんからお兄ちゃんらしからぬ単語が出てきてびっくりだけど、質問がやっぱりお兄ちゃんだよ。小町的にはポイントが大暴落だよ…」

「…そんなに変な質問か？」

「うーん。まあ。お兄ちゃんの言わんとすることは分かるけど、小町にそれ聞いちゃうんだ…」

ハイブリットぼっちである我が妹は、ぼっちマスターである俺の言わんとすることを理解はできる。が、受け入れることはできないらしい。

夜11時の我が家のリビング。

寝る前の甘いコーヒーを飲みながら小町と談笑をしていた際の会話であった。

陽乃さんと今日まで三日連続で会った。

つまり三連続でデートをしたことになる。

初日からあんなことになるなんて誰が想像が出来ただろうか。二日目も三日目も本当にやばかった。何回意識が飛びそうになっただろうか。

魔王様は半端ない。

まじで、半端ない。

だって、少しでも人通りが減ったら…。

「お兄ちゃん。なんか、毎日たいへんそうにして帰ってきてるけど」

「ああ、やばいんだよ……」

「ふーん。でもお兄ちゃん。楽しそうだよね」

「…否定はしないが。でも、いろいろやらかしてしまってる」

当然、カツコよくデートをエスコートできるはずもなく、今日なんか緊張のせいか食事した店に上着を忘れる始末だった。しかも帰ってから気が付くし。陽乃さんが帰りに行ってくれたらしい。本当にダメダメとしか言いようがない。

しかし、今後どうするかだ。

過去は忘れよう。気にすると恥ずかしくて生きていけないから。

とりあえずだ。

その、あんまりガツガツしていいものなのか…。正直、会いたいか会いたくないかと言えば前者になる。

まあ、一緒にいると目立って仕方ないし、こっそり後ろを歩くことは許してもら

えない。

しかし、陽乃さんと話すのは素直に楽しかった。

どんな話題にも乗ってくるし、その豊富な知識もさながら話の切り返しがとても上手い。話していると俺まで話上手になったような気さえする。

いつか一色が絶賛してたが、そのカリスマはまるで王様なのかもしれない。

だからこそ、躊躇してしまう。

「さすがにそれは小町には答えられないよ。自分で考えてね」

「なんだよ薄情だな…」

「お兄ちゃん、おやすみ〜」

そう言って手をひらひらさせながらリビングを後にする小町。一気に静寂が訪れた中、改めて考える。

…どうしたものか。

マイシスターに頼れないと既に手詰まり感がある。しかし、こういうのを詳しうなやつとなると、あざとい後輩が頭をよぎるが…。

ーしかし、今日の出来事を思い出す。

「八幡、スマホ光ってるよ?」

「メールみたいですね…。なんだ一色か…」

「生徒会長ちゃん?」

「ええ。なんか『美味しいスイーツ食べている私』見たいな写メ付きですね。」

「ふーん。生徒会長ちゃんはこんなメール送るんだ」

「ええ、暇なんでしょうね…」

「ふーん。生徒会長ちゃんはこんなメール送るんだ」

「今流行りのインスタなんたらですよ」

「ふーん。生徒会長ちゃんはこんなメール送るんだ…」

そう言った陽乃さんの目は俺のスマホから微動だにしていなかった。

……よし、仕方ないが材木座に聞いてみるか。

さすがに電話するのは気が引けるので一応メールにしてみる。

ー相談があるー

ー我だ、何なりと申すがいい八幡よ！ー

はえーよ！

相変わらず返信が高速だな！

まあ。今回は助かるが。

ーデートってどのくらい連続でしていいものなんだ？ー

…。

……。

……あれ？

ーどういった経緯で私に相談に至ったかは判断つきかねますが、そういう相談は部長殿かお団子の人か、生徒会長様にして下さい。本当にお願います。というか  
ご勘弁下さいー

ーというか貴殿が爆発馳せることを切に願うばかりですー

俺は言葉を発することなくスマホから手を離れた。

しかし、まあ今日はもう陽乃さんからメールもないし、明日はいいってことなのだろうか？

俺と違ってプライベートもいろいろ忙しいだろうし。いろいろ無理させても悪いだろう…。

後ろ髪を引かれながらも、こんなもんだろうと自分を納得させるのだった。

×××

「姉さん？その服は？」

「これは、八幡のだよ」

「比企谷くんの？忘れ物かしら？とりあえず後日返すのでしよう？丁度洗濯するところだから一緒に洗ってしまいましょうか？」

「だめ」

「え？」

「洗っちゃだめ」

「意味が分からないわ。預かりものなんだから綺麗にして返さないと？もしかして普通に洗ったら駄目な素材なのかしら？一般的なパーカーに見えるのだけれど？」

「え。うん。あのね」

「どうしたの？」

「………から」

「？」

「……なくなっちゃうから」

「なくなる？何がよ？」

「…洗ったら八幡の匂いが無くなっちゃう」

「……………はあ？」

「今日は…これ抱いて寝るから」

「……………」

「おやすみ雪乃ちゃん」

「ええ…おやすみ……………」

「……………」

「……………あれが…姉さんなの？」

「……………もしもし？夜分にごめんなさい由比ヶ浜さん。ちょっと聞いて欲しいことがあって…」





## 第3話 俺と魔王と他人の顔

「私ね…時々…」

他人に見せる顔は自身の一面に過ぎず、他人に見せる本当の顔など存在しない。いったい誰から聞いた言葉だったのか。

「自分の顔がね」

俺は自分が比企谷八幡だと認識しているが、彼女から映る俺はどうだろうか。そして、彼女が俺に見せる顔は本物の雪ノ下陽乃なのか、数多の中の一つなのか。

それとも…。

「——に見えるんだよ」

×××

やはり学生の本分は勉強である。

本来、勉強とは自己の研鑽であることから、他人と群れず孤高に自宅で行うのが最も正当なスタイルだろう。授業ならともかく、予習や復習、ましてや宿題なんかを他人と一緒にするなど勉強のスタイルとしては邪道かつ非効率ではないだろうか。よって、孤高な自宅学習こそ俺が最も得意とするスタイル（というかこれしか知らん）である。

ちなみに、勉強が出来れば、好きな科目が苦手な才女達の家庭教師をしながら元選手の先生の家を掃除したりもするし、勉強が苦手な五つ子の見分けも付いたりする。

とりあえず、勉強が出来きるのに越したことはない。まあ、そんな訳で俺は春休みの宿題を片付けようとして、

何故か千葉の図書館の自習室にいたのであった。

×××

自習室はほぼ静寂そのもので、程よい緊張感を与えてくれる。学習する環境としては最適だろう。

しかし、俺のペンを走らせるはずの手は、ほぼ止まっていた。

8人掛けの長机。

入口から一番遠い端の席。

俺は意を決して左隣に小声で声をかける。

「あ、あの…」

「やっそこっち見たね」

机の上に乗せた腕組みを枕にしながら顔だけこちらを向いて、陽乃さんは、にまーとした笑顔で俺を見つめる。

やっ、やりづらい。

目が合った瞬間に頬の温度が上がった気がする。

「た、退屈だったら後で合流しますか？一時間後くらいで」  
意を決して言ってみる。

普段から何かと忙しいだろうし、退屈させているのではないかと心配になった。

「いいよ。見てたいから、八幡のこと」

からかい好きな同級生みたいにあどけなくおっしゃられる。

「わ、分かりました…」

そう言われると何も言い返せない。

これ…新手の拷問ですか？

と、思ったがそれはほんの小手先であり、本番はそれからだった。

だってさあ！

魔王様がこっちのペンが止まる度に教えようと体を寄せてくんの。そしたら痺れるようないい匂いするし、何かいろいろ当たるし、小声で伝えようとするから耳元に吐息が当たるし、発せられる言葉は勉強のことなのに言われるたびに背中が何かゾクゾクするし。それに、教えてくれることに俺が反応したり、問題に正解すると、すんげえ嬉しそうな顔すんの!!

ともかく、もう、そう！

どう考えても集中できないでしょう!!

八幡のSUN値がガリガリ削られてんのね!!

どうか一時間ほど頑張ったが、「少し休憩しますね」とギブアップを宣言した。

×××

とりえあえず戦略的撤退のためトイレを理由に離席することにした。

そして、自習室に戻る途中の文庫コーナーでとある本が目にとまる。

名前に逃げられた男が現実の存在感と他人からの認識を喪失するという話で、なかなか興味引かれるものであった。

そして、パラパラと本をめくっていると、

「それは芥川賞取ったやつだったかな？」

陽乃さんが俺の手にした本をのぞき込むように声をかけてくる。

しまった……。つい、読み込んでしまっていた。

「す、すいません。お待たせして」

「別にいいよ。実は、ちょっと前から見てたんだけどね」

怪獣を作って世界をリセットする少女のような満面の笑顔を浮かべておっしゃられる。

「…声かけてくれていいですから」

「ちなみに、その作者好きなの？前も読んでたよね」

「ちょっと興味があって。前に読んだ段ボール被った男の話は内容がさっぱり分かりませんでした」

「あれはね。私も4回くらい読んだけど、語り部が途中で何回も変わって話を理解するのが大変だったよ」

「まあ何となくこの作者が人間というか『他人』をものすごく意識しているのは伝わりました」

「私もそう思うよ」

「他のも読んでみようと思ったのですが、この短編もなかなか難解で…」

「そうだね。難解というか奇想天外な話も多いけど」

「他はどんな話が？」

「うーん、これなんかはね。かいわれ大根が膝から生えた男が自走するベットで病院を彷徨う話なんだよ」

「かなりシュールですね。それは…遠慮しときます」

「そうだね。失踪三部作は押さえないけどどれも長編だし…。このあたりの短編でもいいけど」

陽乃さんは何だかとても楽しそうだ。

俺自身も人と本のやり取りなんかほぼしたことが無いからとても新鮮だった。

「ならこれ……」

陽乃さんが手に取った本を一旦止めて、

「やっぱりこっちな。一応現代の話で割と読みやすいやつ」

別の本を差し出してくる。

「えっと。どんな話ですか？」

普段はあまりネタバレというか話の内容を事前に仕入れ無いのだが、陽乃さんの要約を聞いてみたくなった。

「それはねー」

×××××

「今日は勉強も教えてもらってありがとうございます。その…本も」

図書館からの帰り際、駅までの道のりで陽乃さんに改めてお礼を伝える。

「どういたしまして。でもあんまり教えすぎると雪乃ちゃんに怒られるからね」

「いや、べつに雪ノ下は…」

「一応、雪乃ちゃんがメインの先生ってことになってるから」

「そうなんです…」

というか初耳なのですが。それにメインの先生はスパルタ過ぎて…。

「それと、これ。この間の忘れもの」

そう言って、なんか高そうなデザインの紙袋を渡される。

「すいません。お手数おかけしました」

前のデートで店に俺が忘れたパーカーだ。

受け取ると何だかふんわりとした匂いがした。わざわざ洗濯してくれたのだろうか。

陽乃さんは爽やかな笑顔で、並んで歩く俺との距離を詰める。

と同時に手を繋がれた。しかも指と指を絡めるやつね。

「ど、どうされました…？」

まだ日が完全に落ちて無いせいか、春先のせいか、外は十分に暖かい。少し汗をかかないか心配だ。

「何でもないよ〜」

落陽を背にした陽乃さんの笑顔は、今日、一番の鮮やかなものだった。

## 第4話 俺と魔王と仁王立ちの

「今すぐ駅前に来てくれないか？」

事の始まりは平塚先生からの電話だった。

有無を言わせない口ぶりにそのまま電話を切りたい衝動に駆られる。いつぞやの千葉の件もあった訳だし。

「……理由を聞いてもいいでしょうか？」

が、電話を切ると後々面倒くさそうなので一応聞いてみる。

「比企谷。今までこういうやり取りはあった気がするが。今回ばかりは黙って従った方がいいぞ」

「いえ、そう言われても」

平塚先生は焦っているというか何か諦めているような口調でいつもの迫力があまり無い。

「まあ、何だ。やはりこういうのは君が適任だと思っただよ」

「とりあえず、あれです。あれが、こう、調子が悪いので。すいません。切ります

ね」

「まてまてまてまて!! まず、待ちたまえ。言い方が悪かった。比企谷。お前を頼りたいんだ」

「すいません。俺ではお役に立てません。失礼します」

「大丈夫だ!! 信じろ比企谷!! 私が信じたお前を信じるんだ!!」

「先生が信じた先生を信じてますから。ではー」

「『静ちゃん誰とお話してんの』』」

「……へ?」

通話口から聞こえたのはよく知る声だった。

「まて! 陽乃! 急に立つな!」

「まだふらついて『次いくよ』!!』」

「次じゃない! まず座れ!! そして水を飲め!」

「『え、お酒がいい』って、いいから水を飲め!!」

「『嫌だ』立つな! 水を『もしかして彼氏』』」

「彼氏じゃない! というかお前の比企谷自慢は聞き飽きた! 帰らせてくれ!!」

『え〜。まだ話足りない〜』

「……………」

「すまないな。しかし、事情は分かった『静ちゃん行こうよ』だろう」

「……………すぐ行きます」

×××

駅前で上機嫌の陽乃さんとげっそりとした平塚先生を見つけた。その場ですったもんだであったものの何とか平塚先生と協力して陽乃さんを自宅のマンションまで連れて行くことができた。

「ゆきのちゃんなら実家だから！上がっても大丈夫だから！」という謎理論に押し通され「十分ぐらいだけですよ」と部屋に上がることになる。

「何か服がタバコくさい。シャワー浴びる!!」

と陽乃さんがバスルームに行った際に平塚先生は玄関を出ようとする。

「比企谷！思い出してくれ。君の使命を」

「って何逃げようとしてるんですか？俺一人じゃまずいでしょ！」

「ってどこのハイパーエージェントですかあんだ。」

「なあ、比企谷。君は陽乃と付き合ってるんだよな」

「…ええ。まあ」

改めてそう言われると何とも答えづらい。

「なら、何も問題はあるまい」

「いや。あるだろ」

「なあ、比企谷。三時間だ」

「え？」

「陽乃と夕方早くから飲み始めて」

「ずっと比企谷との自慢話を聞かされた時間だ」

「……」

「なあ、比企谷。なぜ私は独りなんだ」

「…すいません」

「こんなに酔わなかった酒は久しぶりだよ」

「…マジすいません」

「帰って録画したガンダム見ていいだろ？ ミスターブシドーの正体が気になるんだよ」

「…本当にすいません」

それネタですよ。乙女座の人ですよ。誰が見ても分かりますから。

「あー、独りって気楽だよな。いっそマイスターになりたいよ」

そのまま泣き出しそうな顔の平塚先生に思わずもらい泣きしてしまいそうだった。

「じゃあな。比企谷」

「先生。お気をつけて」

今ばかりは神に祈りたい。この人の幸せを。

「今日はな。本当は私の異動祝いだっただよ…」

いやいや、そんな重要なことを帰り際にさらっと言われても。

×××

シャワーから戻った陽乃さんは家で軽く飲み直すらしい。「軽くだから大丈夫だから！八幡が見てる間だけ！」という謎理論で押し切られた。

ちなみに何故か部屋着に着替えている。

薄いパステルピンクのボーダー柄のフード付きパーカーに、何かモコモコした素材のショートパンツ。パーカーの前のチャックは開けたままで、同系色の下着のようなキャミソールっぽいのはその双丘を大いに主張している。肩紐がずれて、ブラジャーの肩紐がまんま見えちゃってるし。同じピンクっぽい色なんですネ。ええ、全く視線誘導なんかされてませんよ。

「はちま〜ん」

「な、なんですか？」

「えへへ。呼んだだけ〜」

何このカワイイいききもの。

思わず鼻血が出そうだった。

だって普段はしっかりした美人なお姉さんタイプの女性が、なんか甘えた猫みた

いにゴロゴロしてんのよ。ギャップ何たらとかで簡単に語れないでしょうこれ。

というか、いまのお互いの体勢なんですけど。

陽乃さんは俺の太ももに腰をかけ、右手は俺の肩を掴みながら左手でグラスを持っていて。ほとんどお姫様抱っこをしているような状態だ。というかこれ俺が陽乃さんの肩を抱くのが前提の座り方ですよ。モコモコした素材越しとはいえない抱いている手からがその体の柔らかさと温かさがダイレクトに伝わってくる。

っていうかこの体勢おかしいですよ？

あまりにも自然に座られたんで動けませんでしたよ!!

それに、シャワー上がりのふんわりとした甘い香りは、鼻をツンとさせるようなアルコールの強い香りと相まって俺の思考をまともに働かせない。そして俺の内なる化け物達は銀等級の冒険者に狩られるのを待つゴブリンのように怯え出す始末だ。

「はるのって呼んで〜」

「いや、その」

「呼んで〜」

「まあ、その」

「呼んで〜」

「ええ、その」

「呼んで〜」

いやいや三点リーダーは止めましょうよ。後、若干涙目も拗ねたような態度も原則ですからね。そのまま干妹にでもなりそうな勢いだし。まあ姉だけど。ちなみにその内容は笛内で素晴らしい作品により開拓済である。

「八幡のいじわる…」

「いや、その、すいません…」

「謝ってもだめ。悪い八幡だね」

「悪い八幡じゃないですよ。良い八幡ですよ」

と転生しなくてもいいように敵意が無いことをアピールしてみる。

っていうか駄々こねるように動かないで!!元からいろいろ当たってんのがさらに大変なことになっちゃうから!俺中の暴風竜の封印が解けてしまう!助けて

大賢者!!

「その…子供じゃないんですから。大人しくして…」

苦し紛れに何とか口から声をひねり出す。

「……じゃないよ」

「え？」

「私はそんなに大人じゃないよ」

いや十分大人でしょう。一瞬いろんなところに視線が誘導されそうになる。

「私ね。大人って、大きくなったらみんな自然となるものだと思うってた」

「そうなんですか…」

「ずっと早く大人になりたいって思ってたから」

「でもまだ子供で、どこにもたどり着けていない」

「……少なくとも俺からしたら十分に大人っぽいですよ」

『『大人』じゃなくて『大人っぽい』なんだね』

「……正直。何を持って大人なのか子どもの俺にはよく分かりませんから…」

「私もそう。よく分からないんだよね…」

そう言ってどこか遠くを見るように天井を見上げる陽乃さん。

「で。そろそろ止められた方が」

陽乃さんはずっとグラスを持ったまま。

というか会話の度にグビグビしてるし。

次第に俺の胸元に寄りかかってくるし。

自分の胸の鼓動が耳で聞こえそうだし。

「八幡とも飲みたいな」

「…まだ未成年ですから」

「オレンジジュースでないとダメなの？」

「いや、それは…」

「じゃあ大人になればいいんだよ」

「そうは言っても…」

「早く大人になってよ…」

「……」

「私も大人になるから」

「……そうですか」

「あんまり待ちたくない」

「……はい」

「待ちたくないんだよ……」

そう言って陽乃さんは手に持ったグラスを一気に飲み干す。

その際、口からわずかにもれた分が朱色づいた頬を伝い、胸元に雫を落とす。

「ねえ、八幡」

落ちた雫は衣服に広がり、その痕跡を大きく残していく。

「わたし、初めてー」

痕跡は曖昧だった輪郭を徐々にはっきりさせて。

「本当に酔ったかも」

俺の頭の芯を猛烈に痺れさせる。

いつの間にか陽乃さんの左手が俺の頬に添えられていた。

その熱さに意識が刈り取られそうになる。

目の前の何かを求めるような美しい瞳が。

俺の視界を段々と占めていくのを。

俺はただ為すがままに――

「あなたたちは私の家で何をしているのかしら？」  
部屋の温度が一気に氷点下になるような声。

腕組で俺たちを見下ろす、  
すんごい笑顔の雪ノ下雪乃。

続、やはり俺の魔王攻略は間違っている。

---

著者 harusame

発行日 2019年4月20日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/132398/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。